

第13回

こんな時代にロシア語のすすめ

「電話が嫌い、電話が怖い」

黒田 龍之助

電話百周年記念切手



こんな時代にロシア語をやっている黒田って人は、やっぱりヘンなんだな。

そうお考えになっているとしたら、それは違います。ロシア語とは関係なく、わたしは昔から人とは違う行動をしてしまうのです。しかも、それを気にしていないんですね。

たとえば、イマドキ携帯電話を持っていません。スマホだけじゃなくて、いわゆる「ガラケー」も合わせて、そういうものは一切持ち歩かない。ポケベルありませんでした。

先日、JICのスタッフと会って食事をしたとき、帰りの駅で公衆電話から自宅に連絡を入れたのですが、皆さんから呆られました。不便じゃないですかと、誰もが尋ねるのですが、たとえばバスが存在しなかった江戸時代の人に、不便じゃないかと問うてみても、相手はキョトンとするばかりではないでしょうか。もともと持っていなければ、何の不便も感じないのです。ただ、回りには迷惑に思っている人もいます。わたしと待ち合わせて、何かの加減で連絡がつかなくなったら、他に手段がないからです。その不安感を、教え子たちは「昭和のデート」と呼んでいます。

どうして持たないのか。だって、そういうのがあったら、仕事が増えちゃうじゃありませんか。怠け者のわたしには、ぜったい無理。でも、それだけではありません。電話は子どもの頃から嫌いで、保育園生の頃は自宅の固定電話が鳴ると、絶対に近寄ろうとはせず、遠巻きに見ているだけだったとか。そういう性格を持って、この世に生まれてきたのでしょうか。

その性格に拍車をかけたのが、ロシア語でした。

旧ソ連時代の電話が通じないことは、当時は広く知られていました。当局から盗聴されているんだとか、いろんな噂がありました。その真偽はともかく、電話をかけるだけで一苦労だったことは、間違いないでしょう。

ところが、それが理解できない人もいたのです。ある団体が旧ソ連に行くときに、通訳として同行したのですが、メンバーのひとりが、モスクワから家族に電話したいといい出しました。お客さまのリクエストですから、こちらとしても無下に断ることはできません。ホテルのフロントに問い合わせ

たところ、先方はいろいろ調べてくれ、けっこう高い料金を払えば、明日の午後8時から9時の間に10分間だけ通話することができるかと教えてくれました。やれやれ、よかった、何とか連絡できそうだな。わたしはそう思ったのですが、これを伝えたお客さまは驚きました。そんな制限があるのか！娘がアメリカへ留学したときには、いくらでも電話がかけられたぞ。

はあ、でも、ここはソビエト連邦なのです。

お互いに電話をかけて声を聴きたいのは、どこの国でも同じ気持ちです。あちこちで知り合ったロシア人たちは、モスクワに来ることがあれば、レニングラードに寄るのだったら、是非とも電話してほしいといって、番号を書いてくれます。そこで通訳などで旧ソ連を訪れた際、夜に自由時間があるときには、ホテルの部屋から電話してみるのですが、これが通じた試しはほとんどありませんでした。受話器の向こう側から何か音が聞こえると思ったら、どうやら混線しているらしい。そもそもホテルに設置されている電話は、オモチャみたいに頼りないプラスチック製で、これで通話できるのが信じられませんでした。

それでも奇跡的に繋がるがあります。ソ連国内で電話の通じる喜びといたら、たとえ天国に通じたとしても、これほど大きくはないでしょう。ただしいつ通話か途切れるかわかりませんから、相手とは待ち合わせの時間と場所をすばやく決めます。わかりやすいのは地下鉄の改札口。これなら絶対に会えるはず。安心して、電話を切ろうとするのですが、そこでロシア人が、意外なことをいい出します。

「それでさ、あれからどうなった？」

つまり世間話をしてくるのです。おばさんに多いのですが、老若男女関係なく、連絡事項が確認できた後も、なんとなくダベりたいロシア人は少なくありません。奇跡的に繋がった電話だから、今のうちにせいぜい話しておこうというのでしょうか。

しかしながら、こちらは言語の不自由な外国人。とくに電話の会話は、相手の顔も見られないし、身ぶり手ぶりも使えませんので、負担が大きいのです。その困難な状況が、相手にはまったく理解できず、ふだん会っているときと変わらない様子で、とりとめなく話を続けます。わたしは調子を合せながらも、早く会話が終わってほしいと、そればかり願っていました。

電話にしかない魅力というものが存在することは、それでも理解しているつもりです。このことは、レニングラードで経験しました。

あるとき、年末から年始にかけてのツアーで通訳をしていました。正月を跨いでの仕事だったのですが、さすがに 12 月 31 日の夕方から 1 月 1 日の午前中はお役御免となり、自由時間ができました。そこで現地の知人に電話をかけてみると、奇跡的に繋がって、しかも大晦日を祝うから、これからバスに乗って自宅まで来いというのです。バスは電話と同じくらい苦手なのですが、なんとか乗り継いで、年末の一般家庭に寄せてもらいました。

ソ連時代の新年は宗教色なしでお祝いし、クリスマスツリーみたいなものが飾られ、深夜にソヴェーツコエ・シャンパンスコエというソビエト・スパークリング・ワイン（甘口）を飲む。そのときテレビでは、共産党書記長または大統領の演説が流れる。こういったことはどこかで聞いたことがあって、みんな知っていました。

でも 0 時になってクレムリンの時計塔の鐘が鳴ると、その場にいる人はお祝いのことばをお互いに述べ合い、それから知り合いにジャカジャカ電話することは、知りませんでした。日本ではそういう習慣がないと思うのですが、皆さんはいかがですか。

声を聴かせるというのは、やはり大切なんですね。わたしだって、親しい人と会えなければ、せめて声くらい聴きたいと思います。

さて、ロシア語の電話が苦手なわたしでも、語学力の進歩とともに、だんだんこなせるようになりました。好きではなくても、電話での受け答えはやっぱり必要です。

21 世紀になってから、わたしはリトアニア語の研修で、第 2 の都市カウナスで夏休み一か月間を過ごしたことがあります。宿泊は大学から遠くない場所に部屋を借りました。初日に大家さんと会い、カギを受け取りながら注意事項の説明を受けます。ロシア語が分かる年配の方でよかったです。滞在中もときどき電話をくれて、困ったことがないかと様子を尋ねてくれました。

あるとき、部屋の電話が鳴ったので、また大家さんから確認の電話だろうと受話器を取ったら、聞き覚えのない声がリトアニア語で何かまくし立てています。

昔のわたしだったら、さぞや慌てたことでしょう。しかし、そのときは違いました。

まずリトアニア語で「わかりません」といいます。そのくらい習いました。それからロシア語で続けます。「いいですか、ここは個人宅で、わたしは部屋を借りている日本人です。他に誰もおりません」

相手は一瞬、声を詰まらせ、それからロシア語で二言三言、遠慮がちに何かを尋ねるのですが、さっぱり聞き取れません。そこでさらに答えます。

「繰り返します。あなたの求める人はここにいません。電話番号を確かめてください」

いやはや、我ながらずいぶん態度が変わったものです。馬齢を重ねると、ずうずうしくなるのでしょうか。もうロシア語の電話も怖くありません。

でも、相変わらず嫌いです。

~~~~~

## <日ロ交流情報>

### あいちロシア協会の講演会（9 月 28 日） 「帝政ロシアの農奴劇場の世界」



9 月 28 日、あいちロシア協会（小林功会長）の第 1 回ロシアアンサロン・講演会が、名古屋市内の会議室とオンラインの併用で行われました。テーマは「知られざる帝政ロシアの農奴劇場の世界」。昨年、著書『シェレメーチェフ家の農奴劇場：18 世紀ロシアのオペラ文化史』（道和書院）で日本演劇学会の河竹賞奨励賞を受賞した森本頼子さん（愛知県立芸術大学非常勤講師）が、オペラ・演劇・バレエ・音楽など今日のロシアの舞台芸術につながる帝政ロシア期の芸術文化活動について、当時の農奴劇場の資料や写真を紹介しながら、興味深く解説しました。

農奴劇場とは、富裕な一部のロシア貴族が、所有する農奴を俳優や音楽家に起用し、招待客を相手に公演を行った劇場とされ、18 世紀後半から 19 世紀前半にかけてロシア全土に 173 も存在したことが確認されているそうです。領主の土地